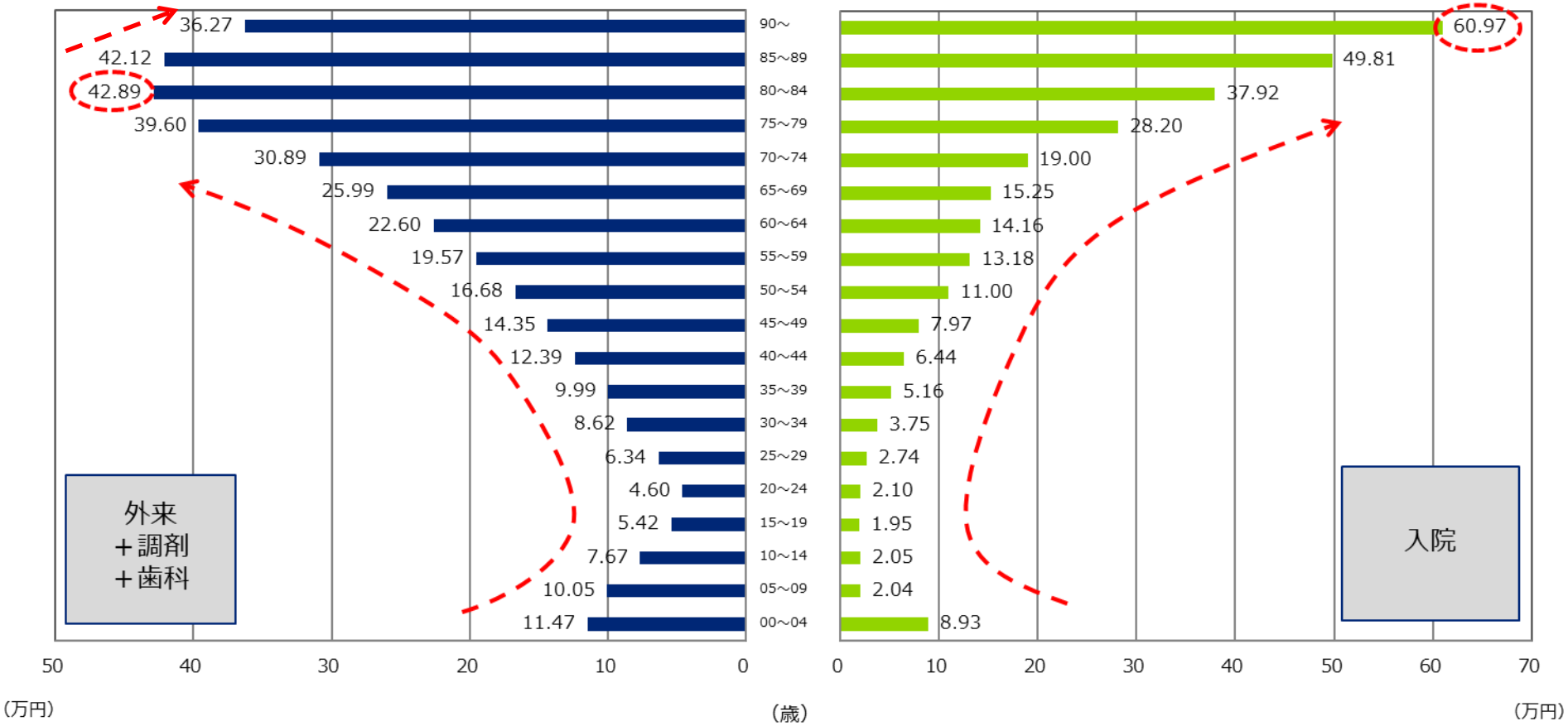
2-2（1）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（入院／外来＋調剤＋歯科）

■被保険者1人当たり医療費

○　入院、外来＋調剤＋歯科ともに、0～4歳を基準に見ると5歳以降一定年齢まで減少する傾向が見られ、入院では15～19歳、外来＋調剤＋歯科は20～24歳が最も低くなり、その後増加に転じる。

○　入院は70歳以降増加割合が高くなり90歳代まで増加を続ける一方、外来＋調剤＋歯科では80～84歳がピークとなり、85歳以降では再び減少に転じる。



※国保＋後期高齢者

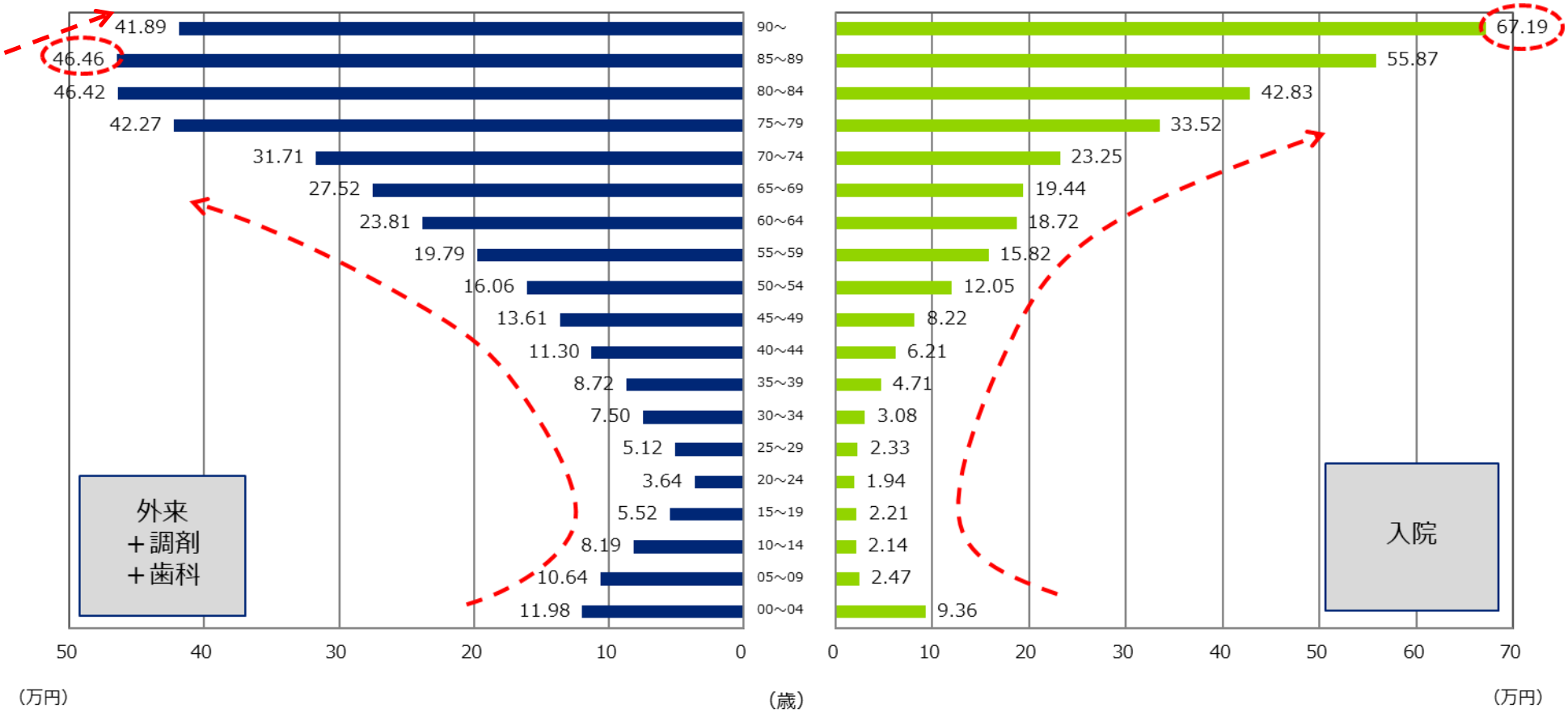
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（1）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（入院／外来＋調剤＋歯科）(男性)

■被保険者1人当たり医療費

○　入院、外来＋調剤＋歯科ともに、0～4歳を基準に見ると5歳以降一定年齢まで減少する傾向が見られ、入院では20～24歳、外来＋調剤＋歯科は20～24歳が最も低くなり、その後増加に転じる。

○　入院は70歳以降増加割合が高くなり90歳代まで増加を続ける一方、外来＋調剤＋歯科では85～89歳がピークとなり、85歳以降では再び減少に転じる。



※国保＋後期高齢者

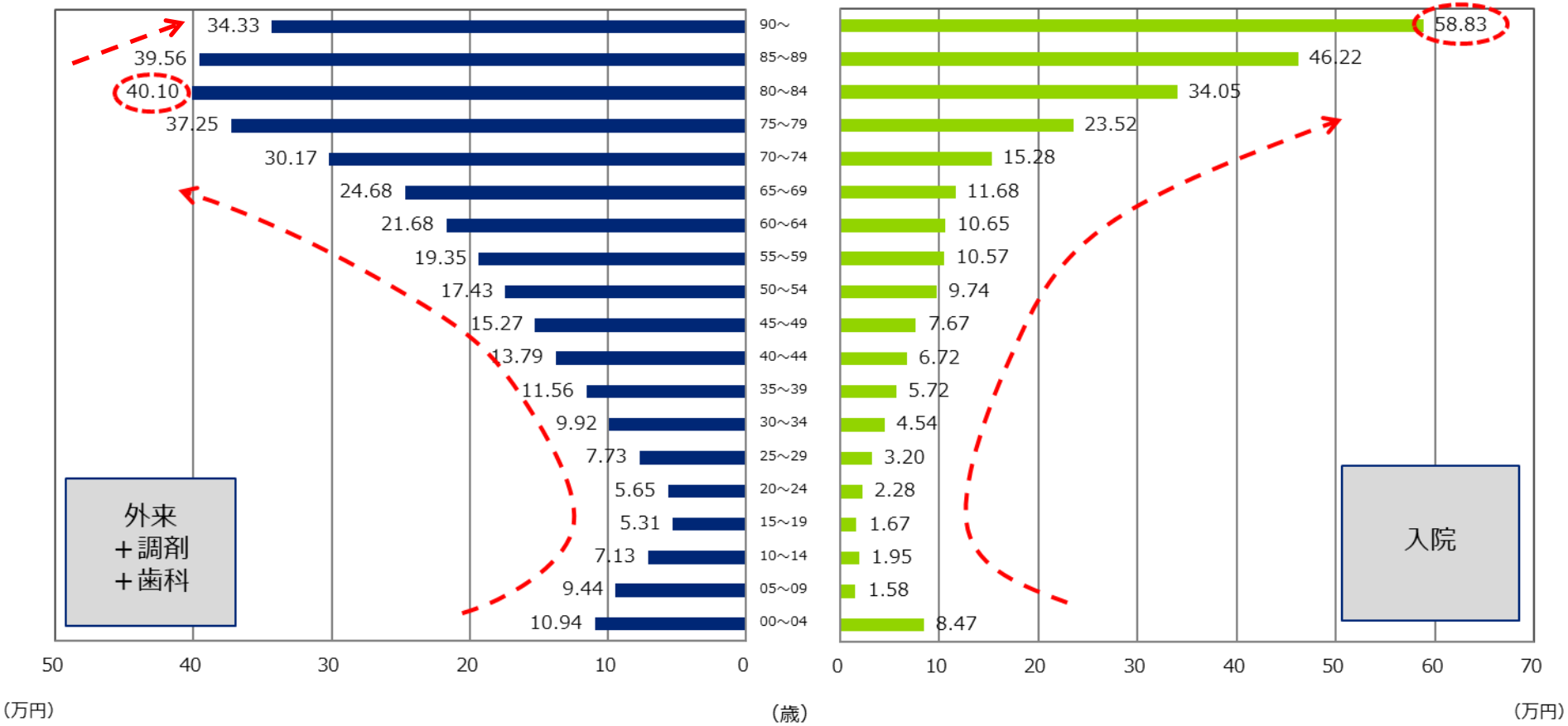
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（1）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（入院／外来＋調剤＋歯科）(女性)

■被保険者1人当たり医療費

○　入院、外来＋調剤＋歯科ともに、0～4歳を基準に見ると5歳以降一定年齢まで減少する傾向が見られ、入院では5～9歳、外来＋調剤＋歯科は15～19歳が最も低くなり、その後増加に転じる。

○　入院は70歳以降増加割合が高くなり90歳代まで増加を続ける一方、外来＋調剤＋歯科では80～84歳がピークとなり、85歳以降では再び減少に転じる。



※国保＋後期高齢者

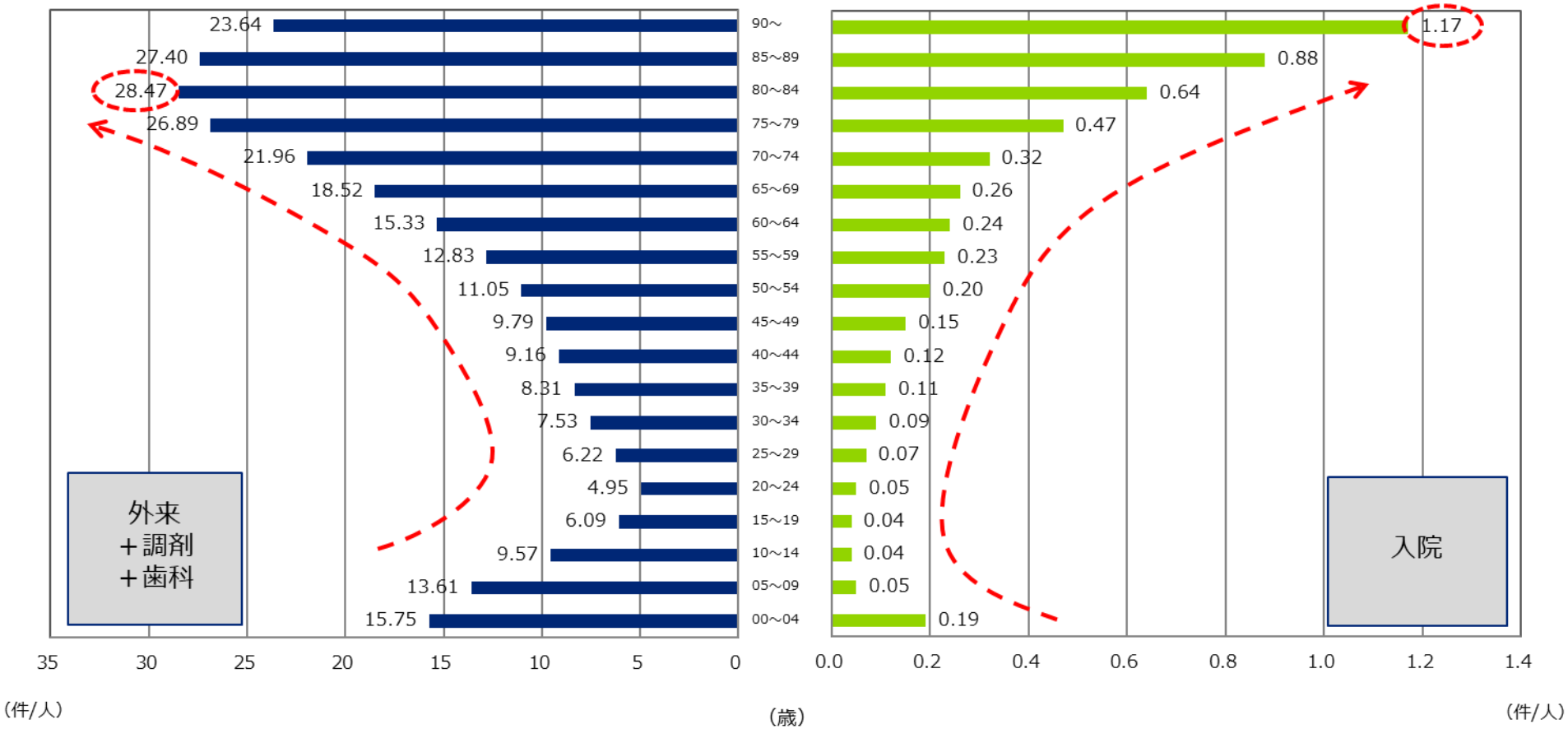
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（2）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（受診率）

■受診率（レセプト件数／被保険者数）

○　入院、外来＋調剤＋歯科ともに、0～4歳を基準に見ると5歳以降一定年齢まで減少する傾向が見られ、入院では10～19歳、外来＋調剤＋歯科は20～24歳が最も低くなり、その後増加に転じる。

○　入院は70歳以降増加割合が高くなり90歳代まで増加を続ける一方、外来＋調剤＋歯科では80～84歳がピークとなり、85歳以降では再び減少に転じる。



※国保＋後期高齢者

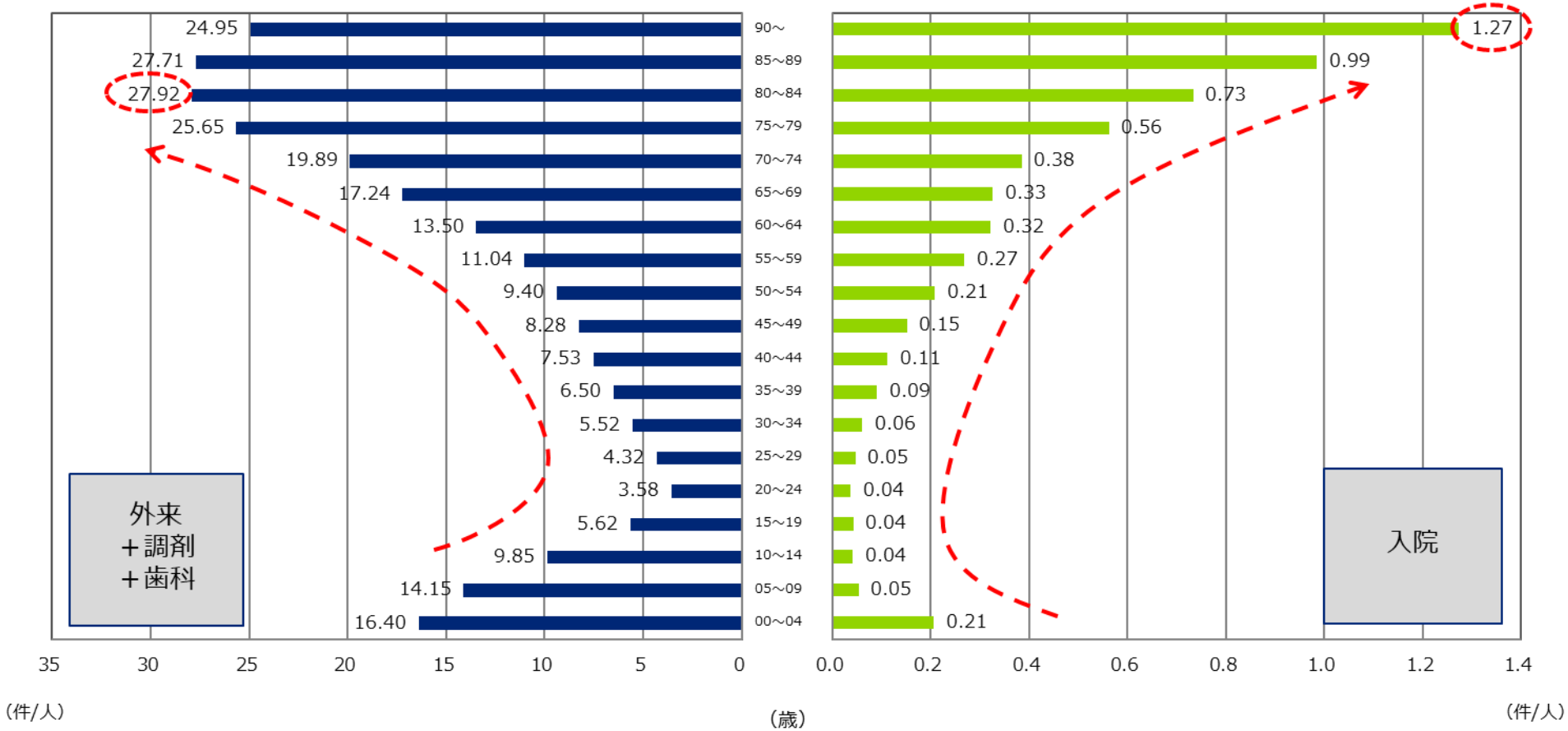
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（2）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（受診率）(男性)

■受診率（レセプト件数／被保険者数）

○　入院、外来＋調剤＋歯科ともに、0～4歳を基準に見ると5歳以降一定年齢まで減少する傾向が見られ、入院では20～24歳、外来＋調剤＋歯科は20～24歳が最も低くなり、その後増加に転じる。

○　入院は70歳以降増加割合が高くなり90歳代まで増加を続ける一方、外来＋調剤＋歯科では80～84歳がピークとなり、85歳以降では再び減少に転じる。



※国保＋後期高齢者

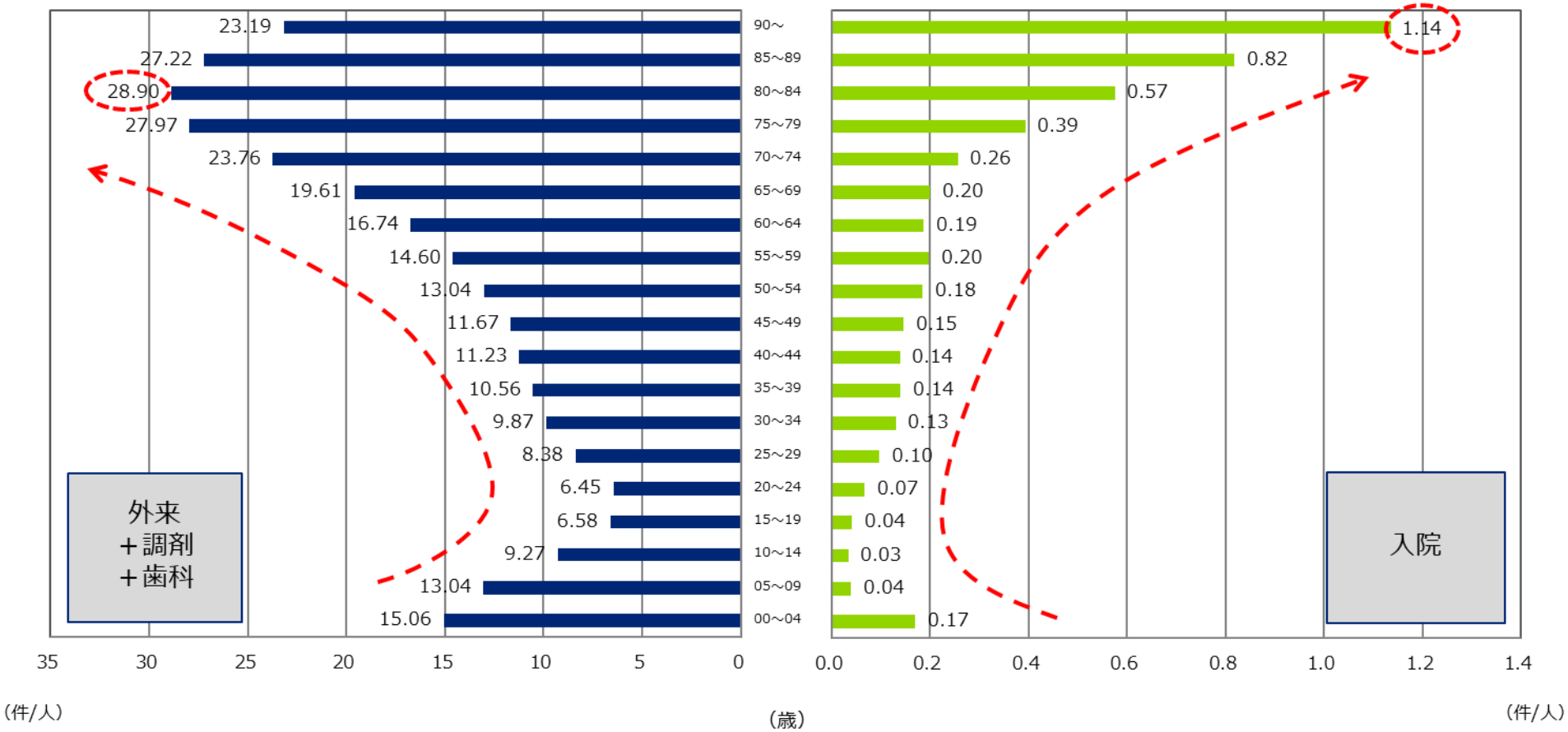
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（2）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（受診率）（女性）

■受診率（レセプト件数／被保険者数）

○　入院、外来＋調剤＋歯科ともに、0～4歳を基準に見ると5歳以降一定年齢まで減少する傾向が見られ、入院では10～14歳、外来＋調剤＋歯科は20～24歳が最も低くなり、その後増加に転じる。

○　入院は70歳以降増加割合が高くなり90歳代まで増加を続ける一方、外来＋調剤＋歯科では80～84歳がピークとなり、85歳以降では再び減少に転じる。



※国保＋後期高齢者

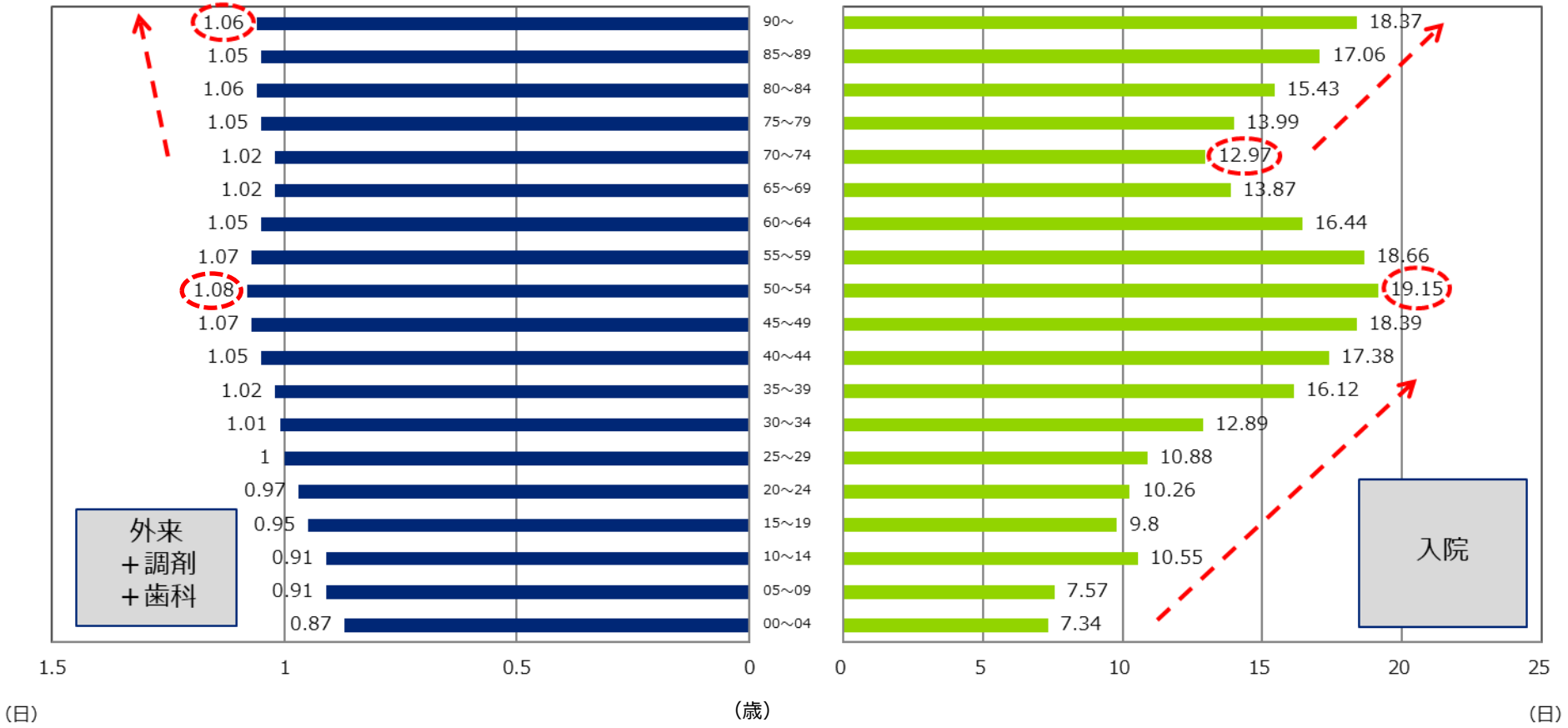
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（3）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（1件当たり日数）

■1件当たり日数（診療実日数／レセプト件数）

○　入院は0～4歳の診療実日数が最も少なく、年齢と共に増加していく。50～54歳でピークを迎えた後70～74歳までは減少するが、75歳以降で再度増加に転じる。

○　外来＋調剤＋歯科においては0～4歳が最も少なくなっている。入院と同様に50～54歳、90歳以降にピークがあるが、入院と比較して年代間の差は大きくない。



※国保＋後期高齢者

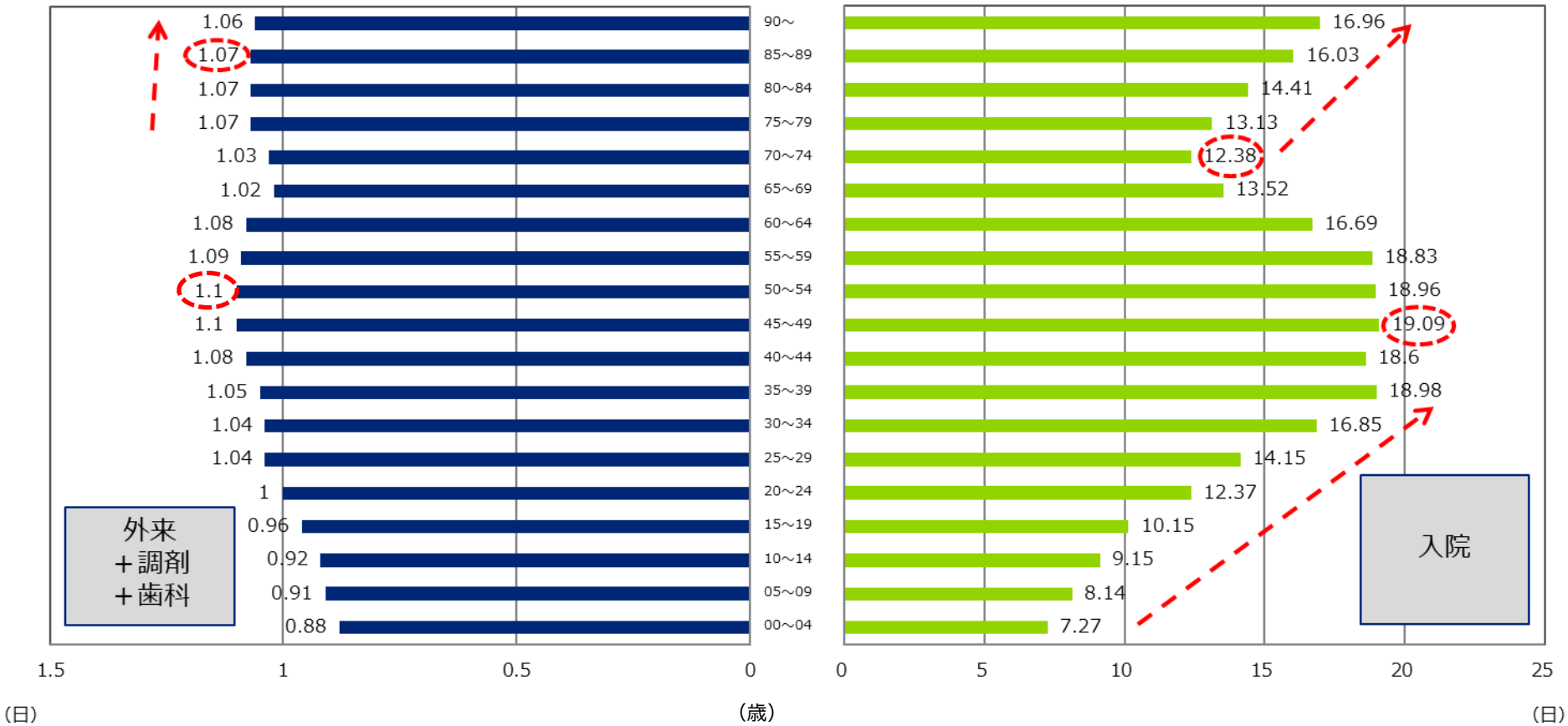
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（3）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（1件当たり日数）(男性)

■1件当たり日数（診療実日数／レセプト件数）

○　入院は0～4歳の診療実日数が最も少なく、年齢と共に増加していく。45～49歳でピークを迎えた後70～74歳までは減少するが、75歳以降で再度増加に転じる。

○　外来＋調剤＋歯科においては0～4歳が最も少なくなっている。50～54歳でピークを迎えた後65～69歳までは減少し、その後増加するが75歳以降大きな差は見られない。また、入院と比較して年代間の差は大きくない。



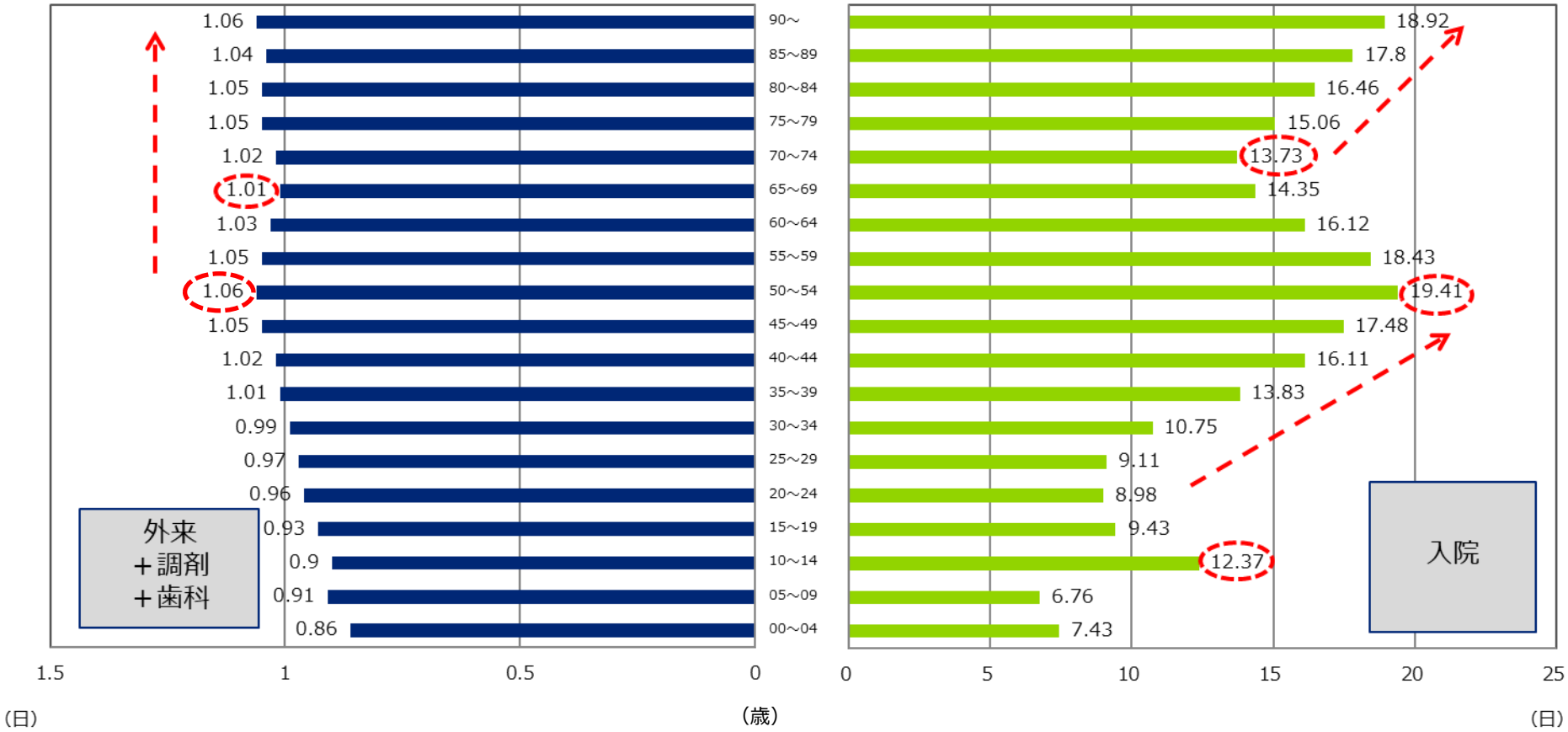
※国保＋後期高齢者

　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（3）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（1件当たり日数）（女性）

■1件当たり日数（診療実日数／レセプト件数）

○　入院は年代間で大きな差が見られ、10～14歳、50～54歳、90歳以降で高い値を示している。
○　外来＋調剤＋歯科においては0～4歳が最も少なくなっている。5歳以降は年齢とともに増加する傾向が見られ、50～54歳でピークを迎える。その後65～69歳まで減少するが、50歳以降数値に大きな変化は見られない。



※国保＋後期高齢者

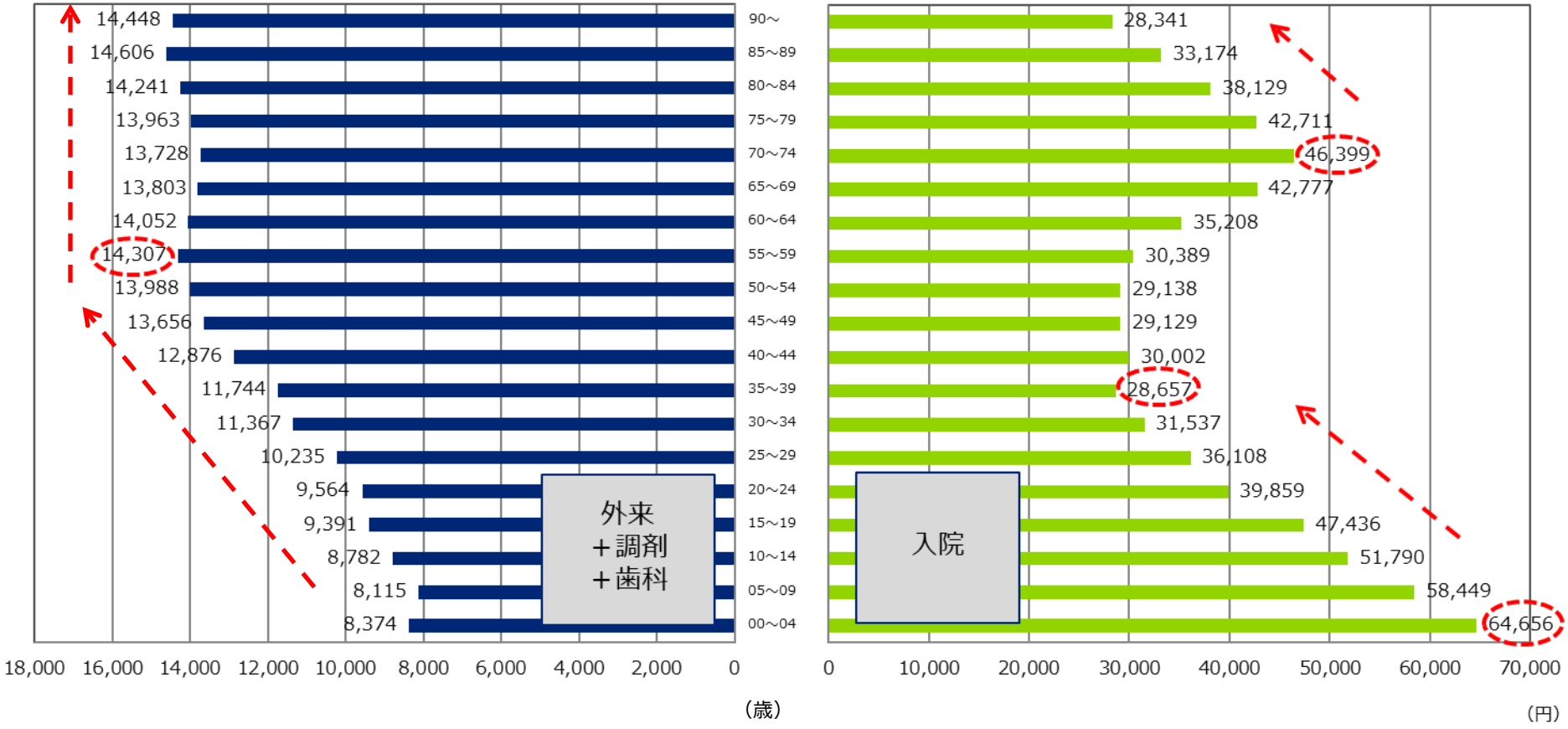
データ：平成29年度KDBデータ

2-2（4）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（1日当たり医療費）

■1日当たり医療費（総医療費／診療実日数）

○　入院では、0～4歳の1日当たり医療費が最も高く64,656円で、その後年代と共に低下していき、35～39歳において28,657円となっている。その後、70～74歳の46,399円まで増加したあと、減少に転じる。

○　外来＋調剤＋歯科では、5歳以降年代と共に増加し、55～59歳に14,307円まで増加し、その後横ばいに転じる。



※国保＋後期高齢者

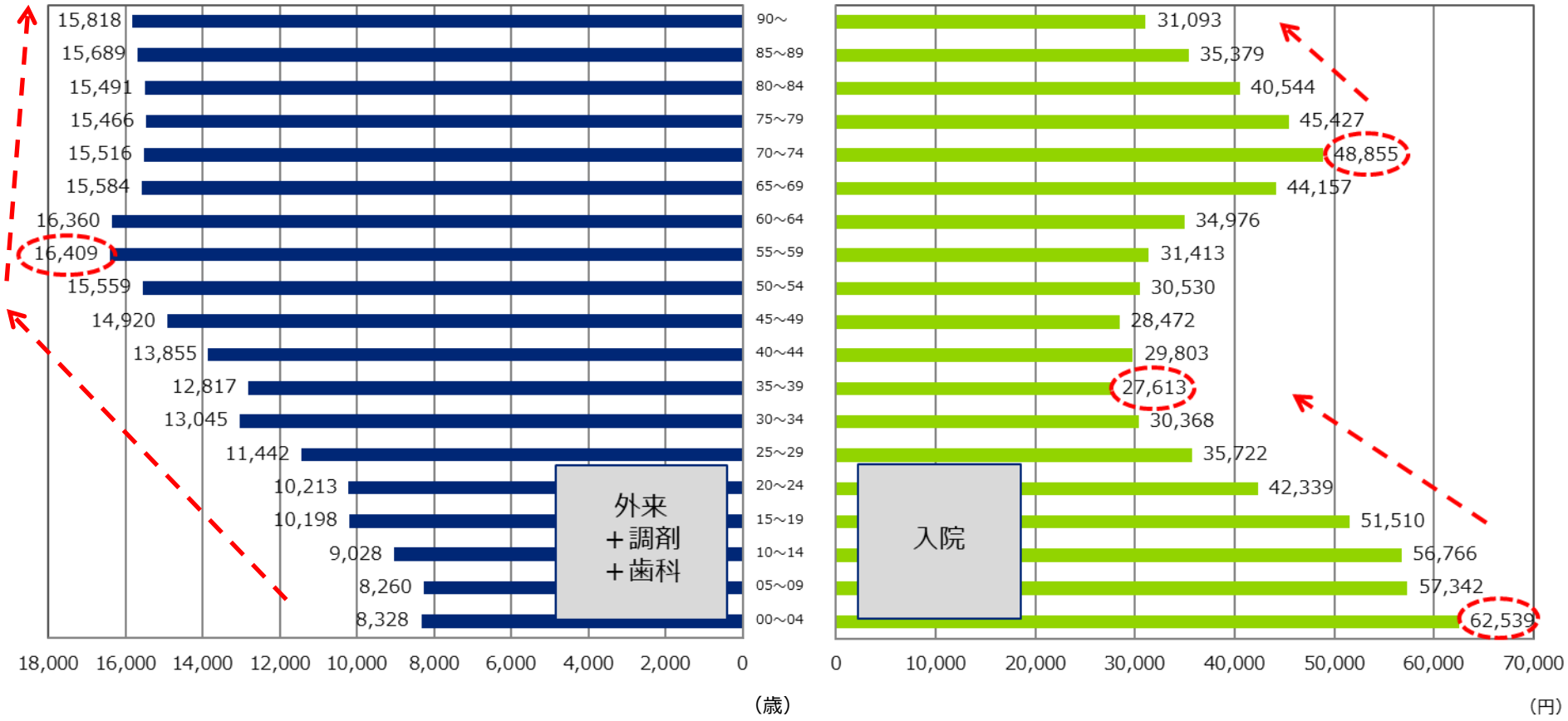
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（4）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（1日当たり医療費）(男性)

■1日当たり医療費（総医療費／診療実日数）

○　入院では、0～4歳の1日当たり医療費が最も高く62,539円で、その後年代と共に低下していき、35～39歳において27,613円となっている。その後、70～74歳の48,855円まで増加したあと、減少に転じる。

○　外来＋調剤＋歯科では、5歳以降年代と共に増加し、55～59歳に16,409円まで増加し、その後横ばいに転じる。



※国保＋後期高齢者

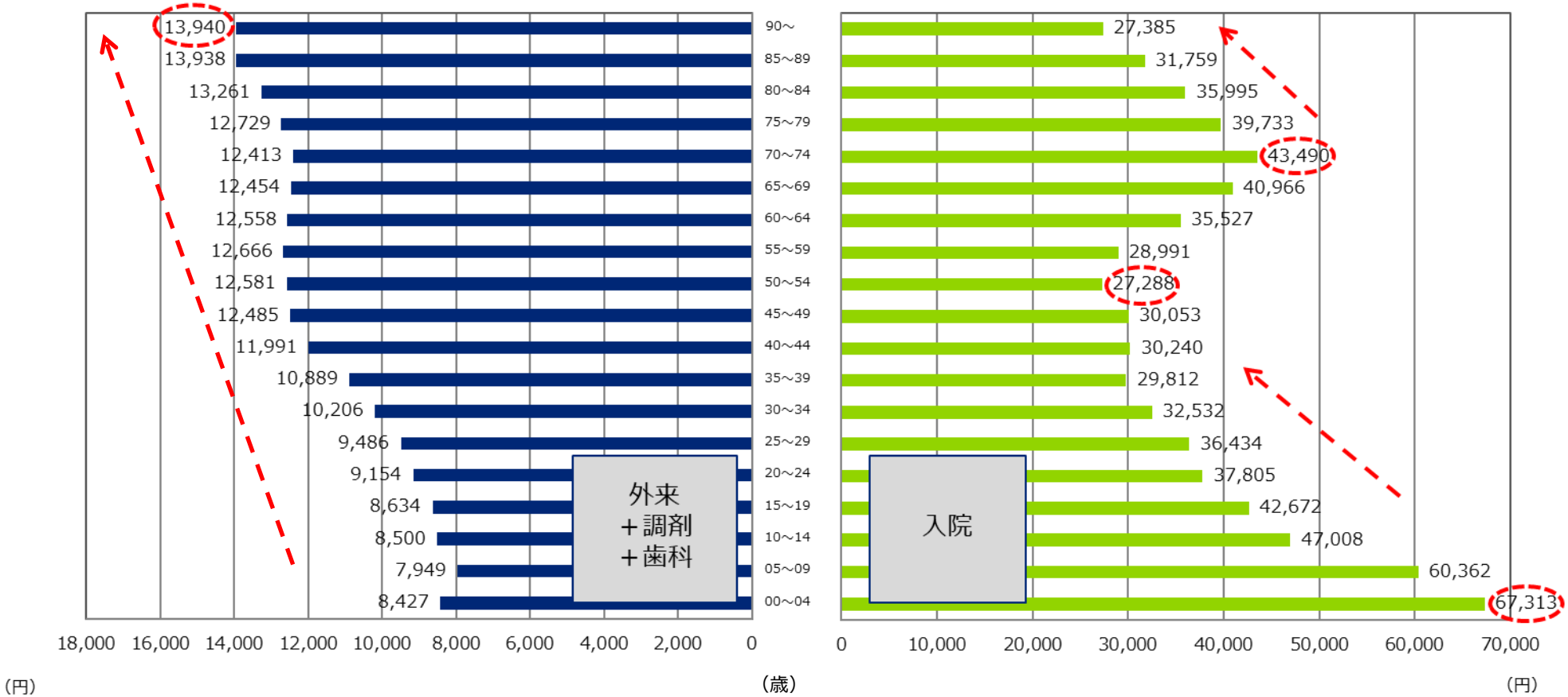
　データ：平成29年度KDBデータ

2-2（4）．年齢別の被保険者1人当たり医療費の三要素分析（1日当たり医療費）(女性)

■1日当たり医療費（総医療費／診療実日数）

○　入院では、0～4歳の1日当たり医療費が最も高く67,313円で、その後年代と共に低下していき、50～54歳において27,288円となっている。その後、70～74歳の43,490円まで増加したあと、減少に転じる。

○　外来＋調剤＋歯科では、5歳以降は90歳以降まで年齢と共に増加する傾向が見られ、90歳以降で13,940円と最も高くなっている。



※国保＋後期高齢者

　データ：平成29年度KDBデータ

第3章　疾病別の状況

3. 疾病別の状況

・国保では「新生物」、「循環器系の疾患」が突出して医療費が高く、後期高齢者では「循環器系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織の疾患」が高い。高血圧性疾患や脳血管疾患を含む「循環器系の疾患」は国保、後期高齢者ともに医療費が高い傾向にあるが、後期高齢者の方が倍近い医療費となっている。【3-1】

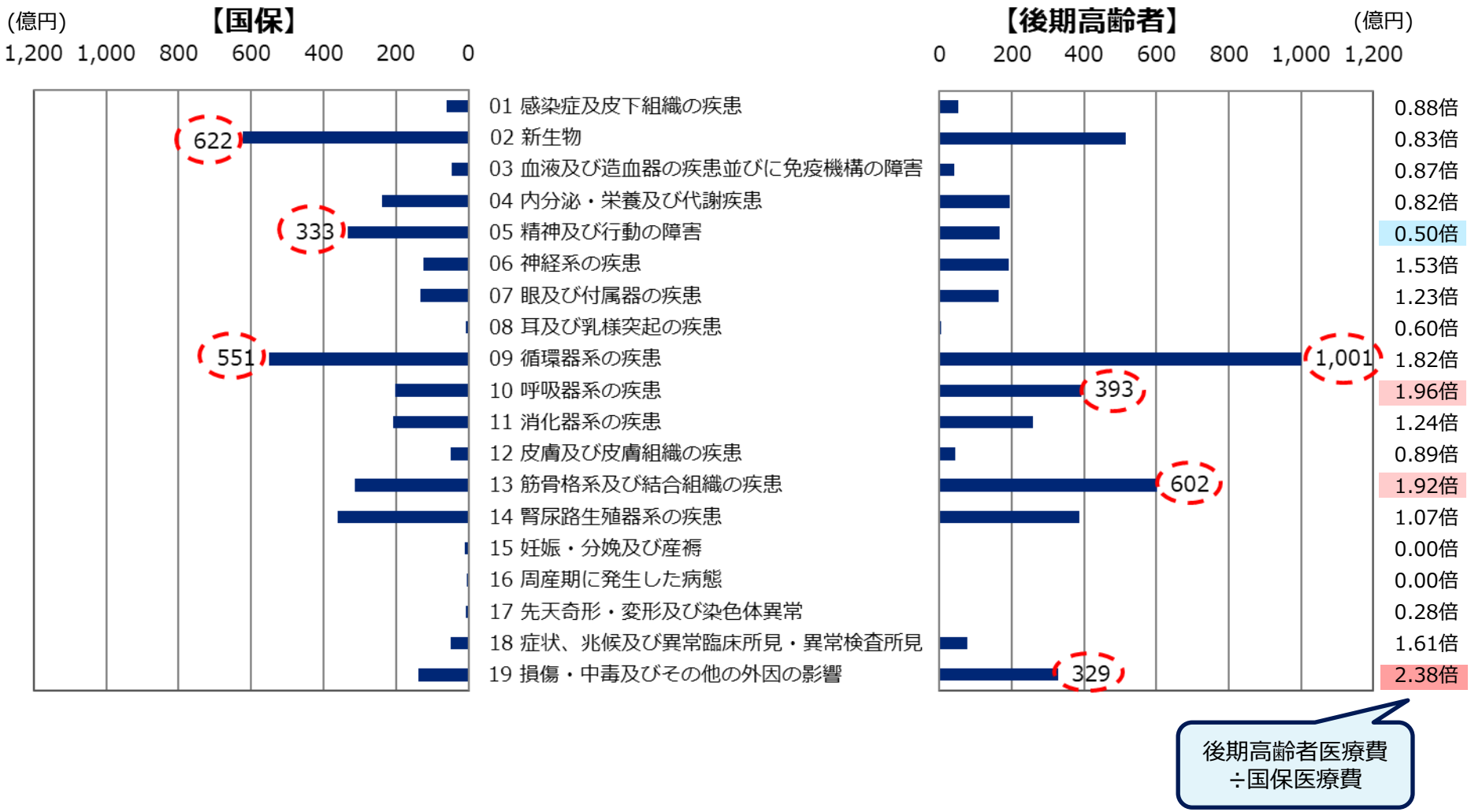
・疾病ごとの医療費をみると、被保険者が増加する60歳から急激な上昇をし、75～79歳で最も高くなっている。特に循環器系疾患の伸びが大きく、全体に対する割合は増加を続ける。精神及び行動の障害に係る医療費は、若い年代で割合が高く、年代があがると全体に対する割合は低下する。新生物（がん）は、60歳以降に全体に対する割合が増加し、80歳以降は低下する。高齢者数の増加に伴い、医療費総額は平成26年度から大きく上昇している。【3-2】

・生活習慣病医療費は、国保、後期高齢者ともに「腎不全」の割合が一番高くなっている。また、脳梗塞やくも膜下出血を含む「脳血管疾患」の割合がとくに後期高齢者で高くなっている。これは、高血圧や脂質異常症など生活習慣病の重症化に伴い、動脈硬化が進行したことが原因の一つと考えられる。【3-3】

3-1. 疾病大分類別の医療費（国保／後期高齢者）

○ 国保では「新生物」、「循環器系の疾患」が突出して医療費が高く、後期高齢者では「循環器系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織の疾患」が高い。特に「循環器系の疾患」については国保と後期高齢者を比較すると倍近い医療費となっている。

○ 国保と後期高齢者を比較すると、国保では「精神及び行動の障害」、後期高齢者では、「呼吸器系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織」、「損傷・中毒及びその他の外因の影響」についての医療費の高さが他方には見られない特徴として挙げられる。



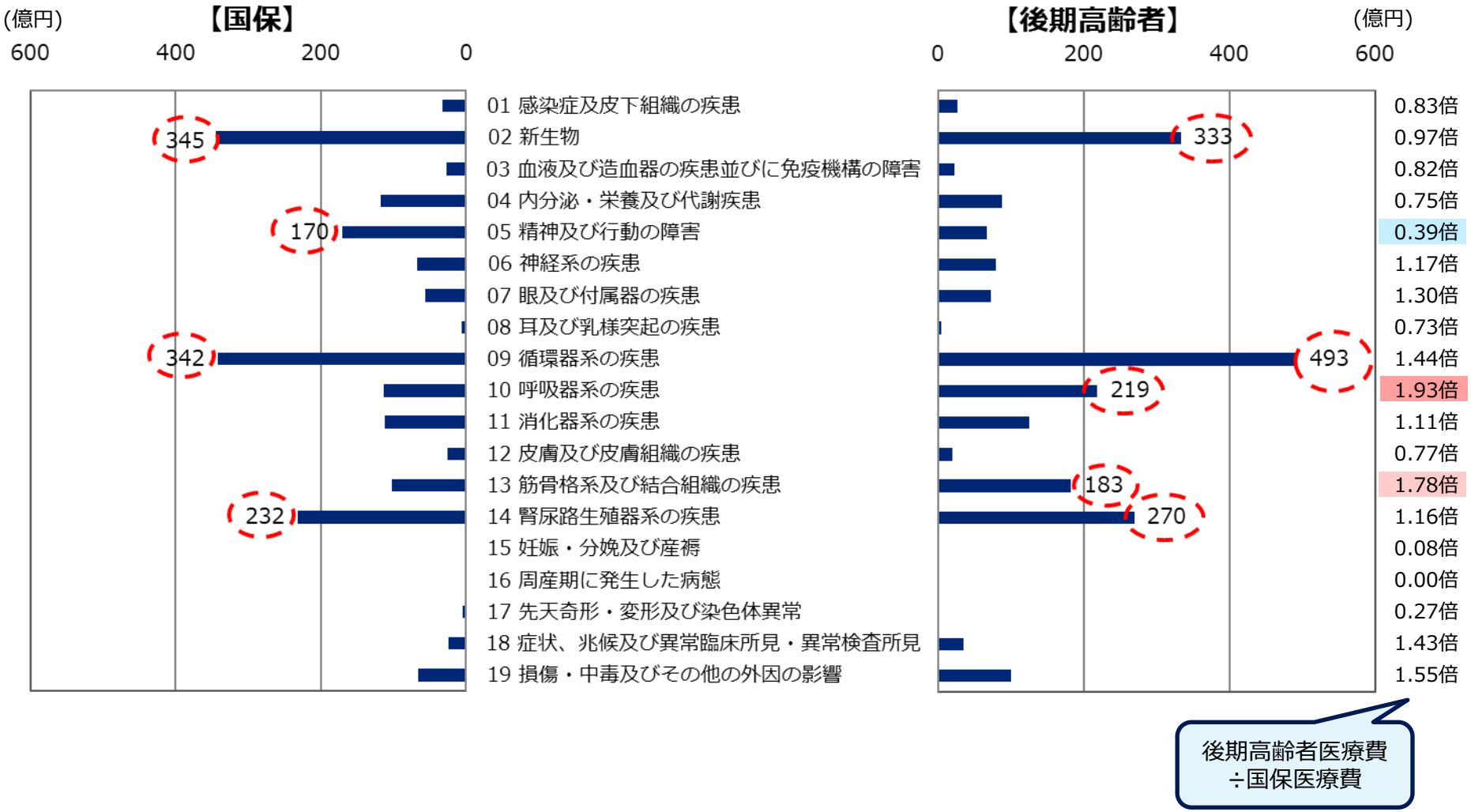
※入院+外来+調剤+歯科

データ：平成29年度KDBデータ

3-1. 疾病大分類別の医療費（国保／後期高齢者）(男性)

○ 国保、後期高齢者ともに、「新生物」、「循環器系の疾患」、「腎尿路生殖器系の疾患」の医療費が突出して高く、200億円を超えている。

○ 国保と後期高齢者を比較すると、国保では「精神及び行動の障害」、後期高齢者では「呼吸器系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織の疾患」についての医療費の高さが他方には見られない特徴として挙げられる。



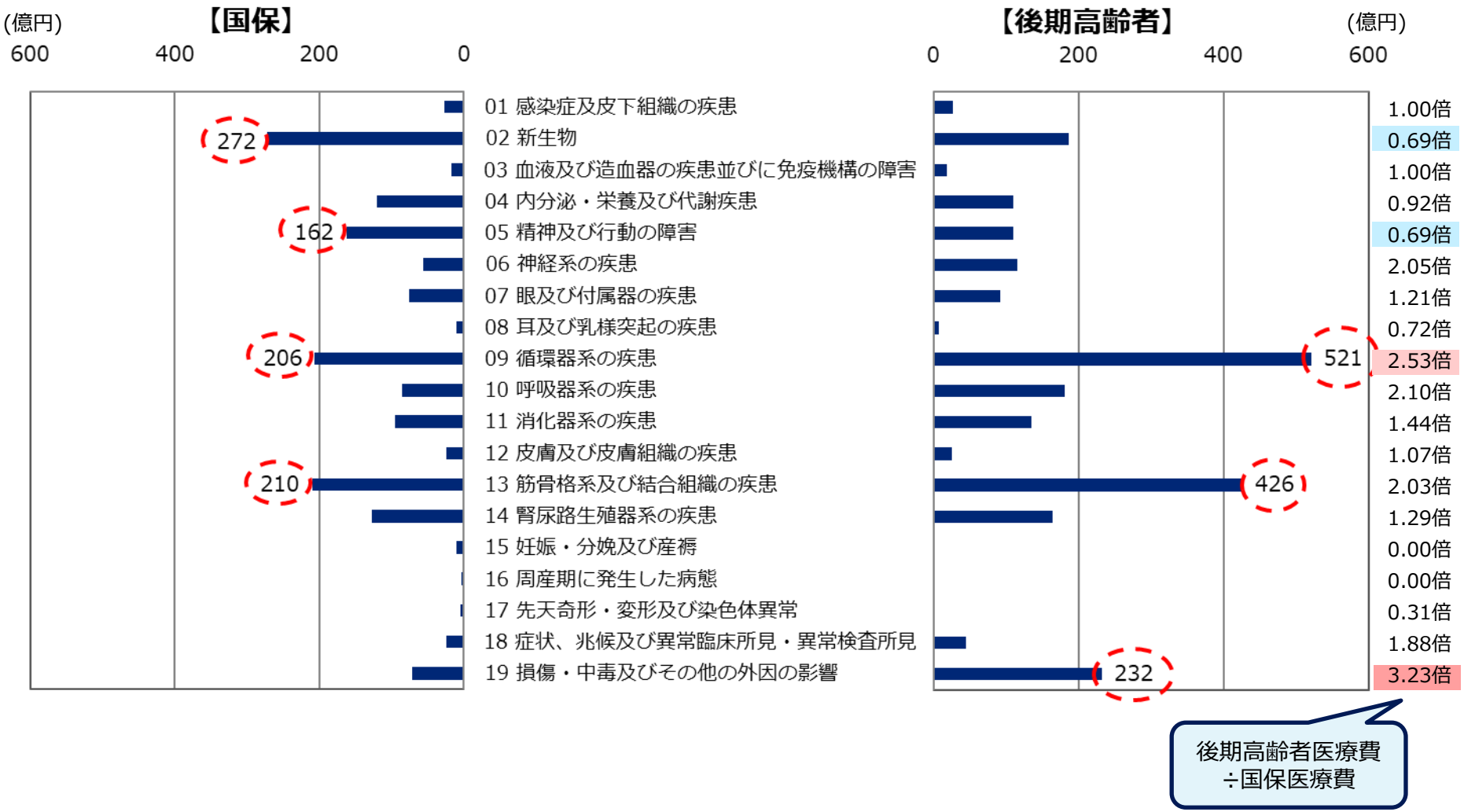
※入院+外来+調剤+歯科

データ：平成29年度KDBデータ

3-1. 疾病大分類別の医療費（国保／後期高齢者）(女性)

○ 国保では「新生物」、「循環器系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織の疾患」の医療費が突出して高く、後期高齢者では「循環器系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織の疾患」、「損傷・中毒及びその他の外因の影響」が高い。

○ 国保と後期高齢者を比較すると、国保では「新生物」、「精神及び行動の障害」、後期高齢者では「呼吸器系の疾患」「損傷・中毒及びその他の外因の影響」についての医療費の高さが他方には見られない特徴として挙げられる。



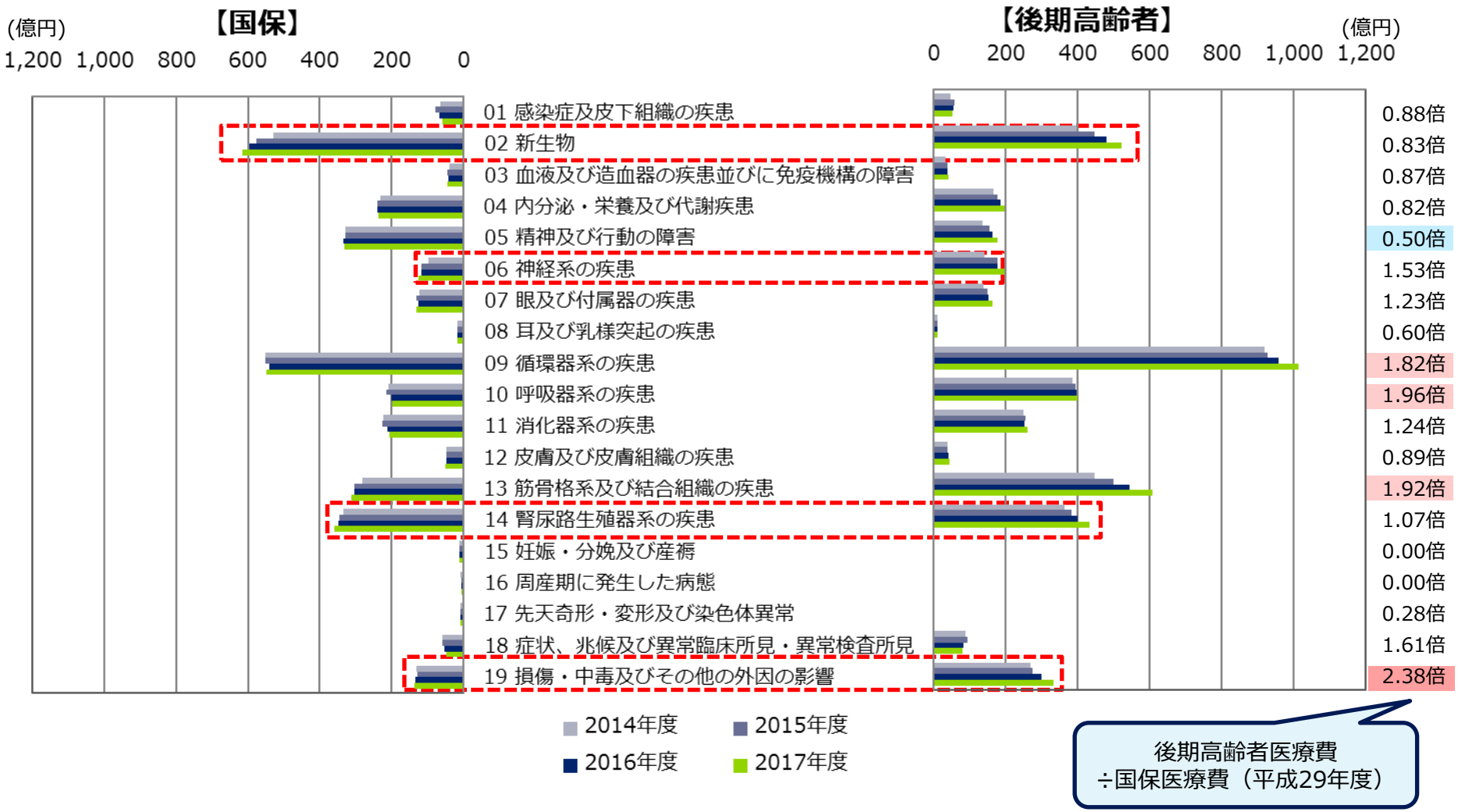
※入院+外来+調剤+歯科

データ：平成29年度KDBデータ

3-1．疾病大分類別の医療費（国保／後期高齢者）(平成26年度から平成29年度の経年変化)

○　平成26年度から平成29年度にかけて、国保、後期高齢者ともに医療費が増加を続けているのは「新生物」、「神経系の疾患」、「筋骨格系及び結合組織の疾患」、「腎尿路生殖器系の疾患」、「損傷・中毒及びその他の外因の影響」である。

○　後期高齢者において疾病大分類別の医療費を見ると、ほぼすべての大分類で、平成26年度から平成29年度にかけて増加を続けている。



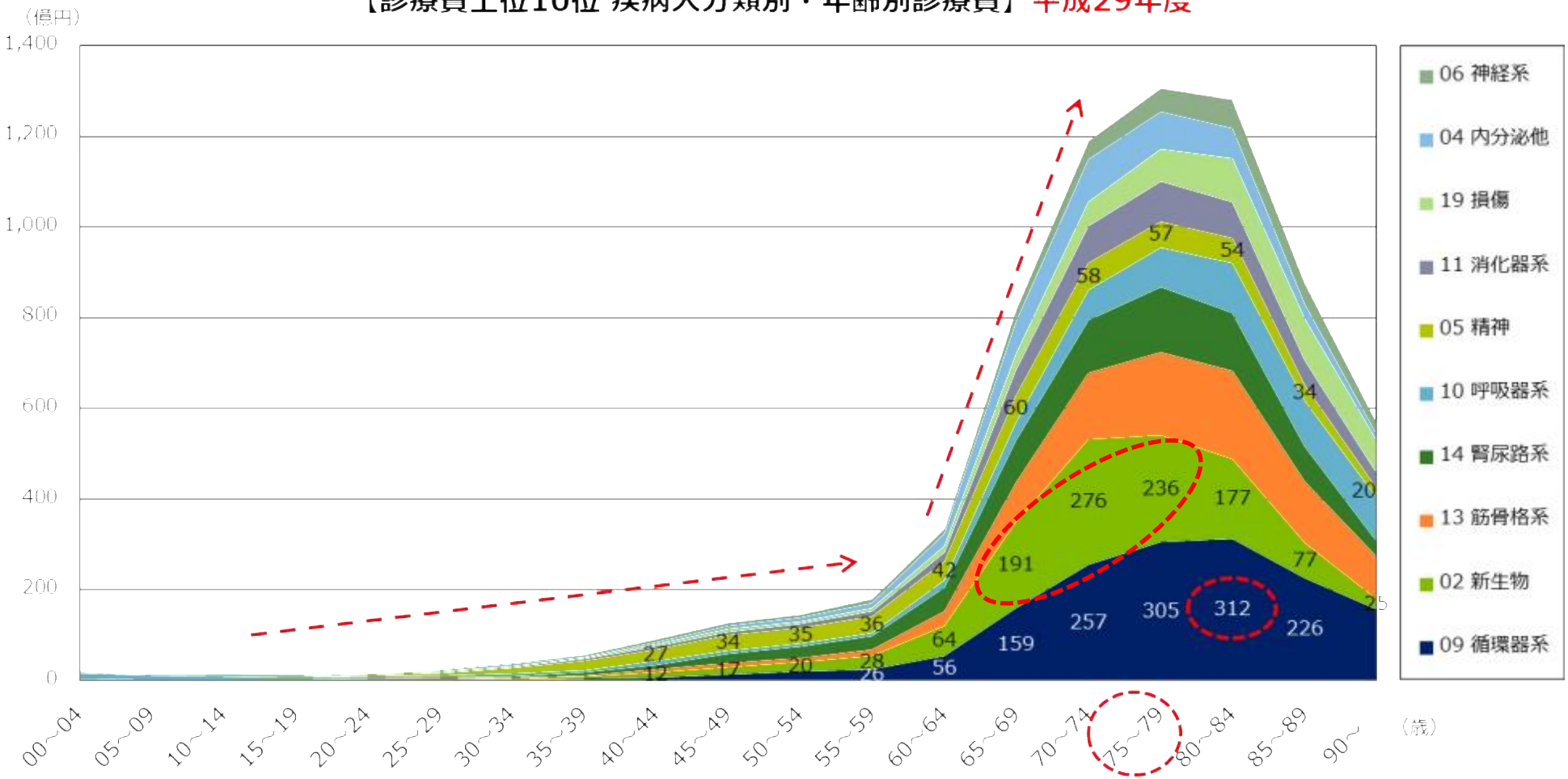
※入院+外来+調剤+歯科

データ：平成26年度～平成29年度KDBデータ

3-2. 疾病大分類別の医療費（県上位10位疾病）の年齢別の総額

○　疾病ごとの医療費をみると、被保険者が増加する60歳から急激な上昇をし、75～79歳で最も高くなっている。特に循環器系疾患の伸びが大きく、全体に対する割合は増加を続ける。
○　精神及び行動の障害に係る医療費は、年代があがると全体に対する割合は低下する。
○　新生物（がん）は、60歳以降に全体に対する割合が増加し、80歳以降は低下する。

【診療費上位10位 疾病大分類別・年齢別診療費】平成29年度



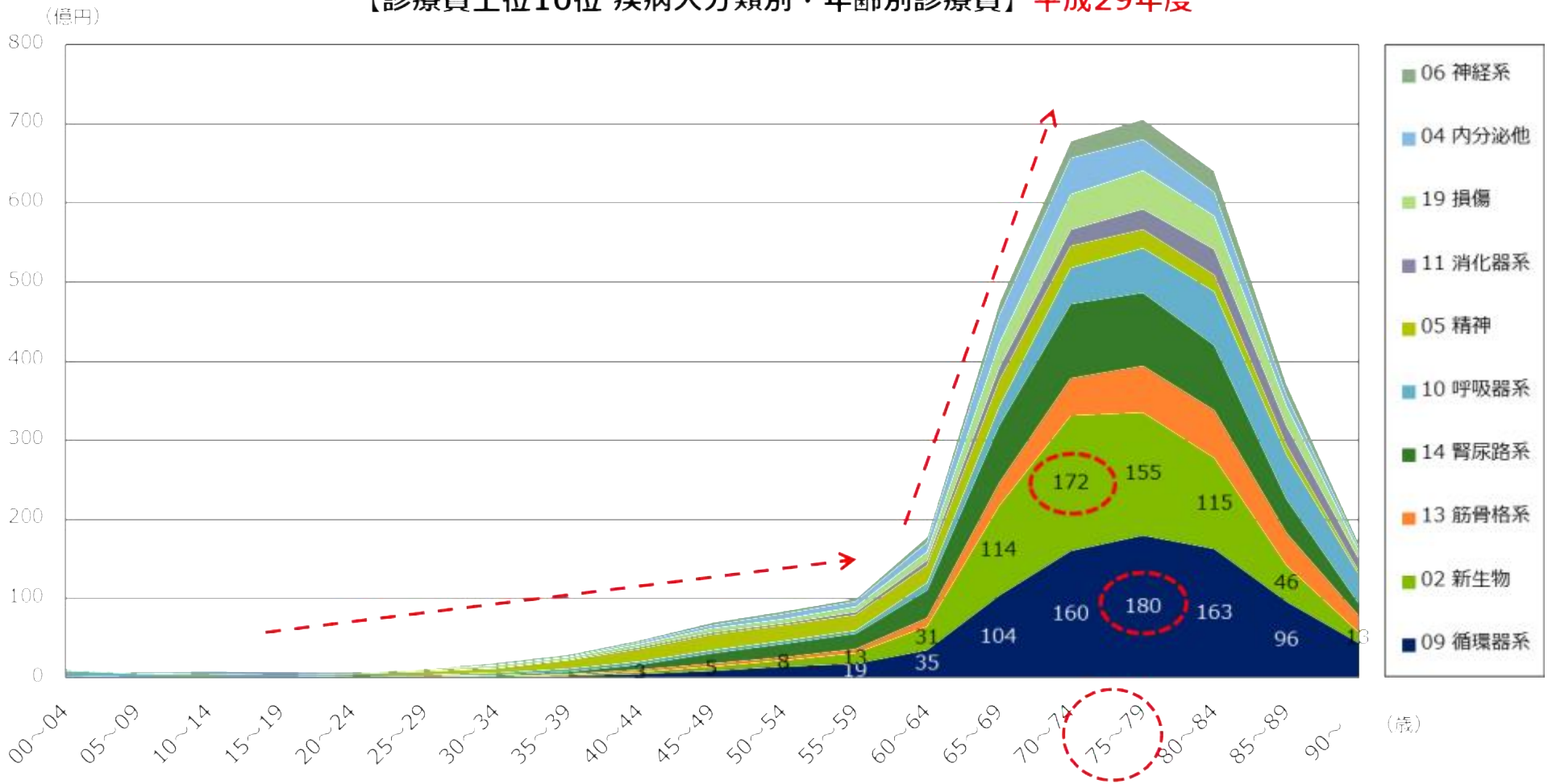
※国保＋後期高齢者
※入院+外来+調剤+歯科

データ：平成29年度KDBデータ

3-2. 疾病大分類別の医療費（県上位10位疾病）の年齢別の総額(男性)

○　疾病大分類別の医療費（県上位10位疾病）は、60歳以降急激な増加をはじめ、総額は75～79歳で最も高くなっている。
○　大きな割合を占める「新生物」に係る医療費は70～74歳において最大となり、その後は低下し続ける。同じく大きな割合を占める「循環器系」に係る医療費は75～79歳において最大となり、その後は低下し続ける。

【診療費上位10位 疾病大分類別・年齢別診療費】平成29年度



※国保＋後期高齢者
※入院+外来+調剤+歯科

データ：平成29年度KDBデータ